

「ささえる力 Power」は、情熱と誇りをもって働く「人」にスポットをあて水資源機構の仕事を紹介するコーナーです。

果たす

施設を支える影の立役者



機構職員が従事する職種の中に「電気通信職」がある。その仕事内容を言葉で表すと「ダムや堰、水路等に係る電気通信設備(受変電設備、無線通信設備、制御設備等)の計画、設計、施工管理、維持管理等」となるが、実際の仕事の様子をイメージすることは難しい。

そこで今回は、愛知用水の下流区間(愛知県・知多半島)を管理する愛知用水総合管理所の下流管理所で、電気通信職の職員として働く伊藤に、日々の仕事の内容ややりがいについて聞いた。



愛知用水概要図

愛知用水は、牧尾ダムのほか、阿木川ダム、味噌川ダムを水源とし、木曾川から取水して、農業用水・水道用水・工業用水を供給しています。

幹線水路は、最大計画流量 32.5m³/s、延長約 112km と長大で、150 箇所を超える分水工のほか、チェックゲート、放余水工、調整池など、多数の管理施設から構成されている大規模利水施設です。

Profile

愛知用水総合管理所 下流管理所

伊藤 大 Dai Ito

平成15年に電気通信職として水資源開発公団(現水資源機構)に入社。利根川河口堰管理所(千葉県)・管理課、池田総合管理所(徳島県)・電気通信課、愛知用水総合管理所・設備課を経て、平成24年4月より現職。

電気通信職の仕事

「電気通信職は、弱電から強電、ネットワーク装置に無線装置と、ダムや水路等の施設に関係するすべての電気設備を取り扱うため、業務内容が幅広く、非常におもしろい職種だと思います。」

このように語るのは、入社11年目を迎えた伊藤。現職の愛知用水といった水路だけでなく、これまでにダムや河口堰での勤務経歴を持つ、若いながらも経験豊富な電気通信職員だ。

「現在の仕事は、愛知用水の水を各地に送り届けるための各種施設の管理です。特に下流管理所管内はポンプ場が多く、各ポンプが正常に稼働するための電気設備や遠方監視のための通信設備、計器類のメンテナンスを中心に行っています。万が一、ポンプに不具合が生じた場合には、休日・夜間を問わずに現場に駆けつけ障害対応にあたります。障害原因は現場に到着するまで分からないこともあり、不安やプレッシャーとの戦いですが、そこがまたこの仕事のおもしろいところ。」

そんな伊藤は、電気通信職の仕事をこう例える。



管理所内の操作室



ポンプ場の点検



愛用のトラックと



複雑な電気設備を取り扱う

「ダムや水路を人間の体に例えると、ゲートやポンプといった設備は筋肉です。そして、筋肉を動かすための神経を電気だと考えてください。電気通信職員は、電気という神経回路を繋ぐことで、筋肉、ひいては体全体の活動を支えているのです。」

仕事上の工夫

下流管理所の管轄する区間は下流部 37km で、ポンプ場の数は 16 箇所にあふため、一通り巡るだけでも相当な時間と労力を要する。伊藤は、効率的かつ迅速に業務を遂行するための工夫が必要と語る。

「ポンプが障害で停止した場合、多様な障害原因を特定し迅速に復旧する必要があります。そのため、常に現場に必要な工具や備品を積み込んだ愛用のトラックで現場に駆けつけています。まさにサービスカーのような位置づけです。」

また、周囲の人々とのコミュニケーションの取り方も、伊藤ならではの工夫の一つだ。

「正直なところ、愛知用水のこの長大な水路、多数の設備を自分一人ですべて把握することは難しいです。ですから、設備状態の変化や気付いた点、改善点などの情報を地元の土地改良区や機場清掃のシルバーさん、農家の方々との会話の中から収集し、施設管理に反映していくよう心がけています。私一人では目の届かない普段の運転状況などの情報が聞ける

ため、ポンプ吸い込み口の除塵作業が必要な時期の判断や不具合発生の予防保全に繋がることがあるのです。」

誰かの役に立ちたい

こうした工夫の積み重ねの結果、発生した障害を的確に発見し、迅速に復旧を果たすことができた時、伊藤は仕事のやりがいや達成感を感じるという。

小学生の頃のダム見学。それがきっかけとなり、ダム関係の仕事に漠然と憧れた。そんな憧れを抱く中で水資源機構に出会い、社会の役に立ちたいという思いから入社を決めた伊藤。

「些細なことであっても、誰かの役に立ち感謝の言葉をもらった時は、とてもうれしく思います。」と笑顔を見せる。

機構では将来、小水力発電の立ち上げに関わる仕事がしたいと語る伊藤。今日もまた、昨日以上に誰かの役に立ちたいと願っている。

ゴルフが趣味の伊藤さん。二人のお子さんと過ごす時間が一番リラックスできて楽しいと語る、良いお父さんです。

